
ガイラーシェトラ

ネコガエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガイラーシエトラ

【Nコード】

N2667X

【作者名】

ネコガエル

【あらすじ】

心の奥底を感じらる少女。生と死の間をさまよった少年。過去に秘密がある少女。魔術を使う少年。何かを秘めた少女。この5人が出会った時、世界が変わり始める！

く龍の石の秘密く（前書き）

私はこれが初投稿です。こんな文章ですが、誰か1人でも「面白い！」って思ってくれたら、私は幸せです。

（龍の石の秘密）

プロローグ

風が、吹き抜ける。

焼け野はら。そこに、たたずむ黒い姿が二つあった。「おい」

男が言った。左頬に傷がある。刀傷のような長い傷だ。

「お前、まだ気付いてないのか」

「何が」

男に向かい合って立っていた少年が聞き返す。深い藍色の瞳が怒りで燃え上がっている。漆黒の髪に漆黒のマントという姿の少年の歳は、十三ぐらい。だが、声はまるで地を這い上ってくるかのような低い声をしていた。

「自分が愚かだって事にさ」

「おれが愚かだって言いたいのか」

少年が男を睨み付ける。だが、その顔には血の気がなかった。左の指先から、赤い滴が滴り落ちる。

「そうさ」

男には、少年よりは余裕があった。蔑むような笑みをにんまりと浮かべる。

「もう死んでしまった者のために命をかけるなんて、愚かだとは思わないかい？」

「なんだと」

赤黒く濡れた左肩と、それを押さえている右手、その肩が震える。怒りが、ふつふつと煮えたぎる。

「殺したのは、お前じゃないか。何の罪もおかしていない人を殺す事のほうがよっぽど愚かだろう」

「何の罪もおかしていない人だと？ お前、自分の親が一体何をしていたのか知っているのか？」

少年が黙り込む。その顔は、さらに青白くなっていた。くらりと目眩がする。

(……ヤバイ)

貧血を起こしかけている。そこまで出血はひどくなかったはずなのだが。

さっき肩を切り裂いた魔術の刃は、何か特殊な毒性だったのだろう。(くそっ。喋っていたのは時間稼ぎだったんだ。早く攻撃しないとこっちが不利になる)

手を持ち上げる。血だらけの指先がぴたりと男を捉える。魔術を使おうと、意識を集中させる。だが、その手はだらりと体の脇に垂れてしまった。力が入らなかったのだ。体が重い。

「ほう。やっど毒がまわってきたのか」

男が楽しそうに笑った。

「くそっ」

もう、体を支えるだけで精一杯になっていた。

「全く。仇をとろうなんて愚かな事を考えるのが悪いんだ」

ぐらりと体が傾ぐ。血やら泥やらで薄汚れた体が焼け野はらに倒れ込む。

「ぐっ」

うめく。男が歩み寄ってきた。

「お前の負けだ」

「まだおれは……死んでない」

低く掠れた呟きは、すぐにうめき声に変わった。

「死んだも同然だ。後数分もすればお前は死ぬ」

馬鹿にしたように笑う。

「ま、せいぜい綺麗な夜空でも眺めてあの世の思い出話にすれば良
いさ」

そう言って男は立ち去った。

(とどめを刺す必要もないってわけか)

満天の星空を見上げ、自嘲気味に笑ってみる。死が近づいてくるの

を感じる。ゆつくりと、瞼が閉じていく。その刹那、辺りが暗くな
った。

「!?!」

目を開ける。濃い藍色の瞳と目が合った。辺りが暗くなったのでは
なかった。誰かが顔を覗き込んできたのだ。

「な……なんでガイラーシエトラ、お前がここに……」

吸い込まれてしまいそうな美しい藍色の瞳をした旅人は柔らかな笑
みを浮かべた。その質問には答えずに、ガイラーシエトラは言った。
「きみは、運命を変えたいかい」

？ 旅人

何かやりたい。

毎日毎日店の手伝いをして同じ事をするのは何かが違う気がした。
もっと、新しい事をしてみたい。もっと、色々な事をしてみたい。
そんな時だった、彼がやってきたのは。

いつものように、接客をしていた。いつものように、ドアベルが鳴
った。いつものように、客が入ってきた。

（あれ。旅人？）

この季節ではめずらしい、旅姿の男が入ってきた。男が椅子に座る。
急いで男のそばへ駆け寄った。

その子の名はシャラ。この店の養子であり、店員である。まだへそ
の緒が取れていない頃に、店の前に置き去りにされていたそうだ。
シャラが男に声をかける。

「お客様、何かご注文はありますか」

男が顔を上げた。漆黒の髪が額の上で踊る。シャラは、息を呑んだ。
彼の瞳が、濃い藍色の瞳をしていたからだ。それはもう、深い深い
引きずり込まれてしまいそうな、深海の色。

シヤラは、見とれてしまった。男が、笑う。苦笑いだ。

「そんなに見られても、困っちゃうなあ」

それを聞いて、シヤラは耳まで赤くなるのを感じた。

「あっあの……その……」

その姿を見て、男がまた笑う。

「いいんだよ。……少し話したいのだが。いいかい？」

男の顔が、真顔になる。シヤラの頭から、恥ずかしさが一気に吹き飛んだ。

「あっ、はい」

「ああ、座って。立ってでは疲れるだろう」

シヤラが机を挟んで男の向かい側の椅子に座る。

「手を出して」

言われるままに、シヤラは右手を出した。男はその手に、小さく固いものを置いた。そのまま、シヤラの手を包み込み、握らせる。男が、手をはなした。

「きみは、運命を変えたいかい？」

ガイラーシエトラ

凜とした声。恐ろしいほど美しく、透き通った全く濁りのないもの。男の声は、小さかったはずだ。店の中は、騒々しかったはずだ。なのに。

なのに、シャラの耳には男の声がしっかり届いた。そしてその耳の中にこびりつき、一生忘れる事が出来なかった。

（運命を、変えられる？）

運命を、変えられる。かもしれない。

シャラは、ゆっくりとその言葉をかみしめた。

運命を、変えられるかもしれない。

何かが違うと思いつながら、老いて死ぬまでこの店をやり続ける人生を、変えられるかもしれない。

シャラは、ゆっくりと手を開いた。

そこにあったのは、石。龍の姿をかたどった刻印をした透き通った、美しい水色の石。少しも歪みのない、完全な球体だ。

変えられる確率が、少なくともいい。大海原の不可能に、小石ほどの、砂粒ほどの可能でもいい。

（変えたい）

どんなに確率が低くても、可能性さえあればいい。

そんな思いが、シャラの心の中に大きく根をはった。この石に、この男にかけてみよう。

シャラは、うなずいた。

他人ではなく、自分のこの手で運命を変えたい。

「変えたければ、この石に願うといい」

シャラはまた、しげしげと石を見詰めた。

この石で、変えられる。人生を、運命を変えられる。

シャラは、そうやってしばらく石を眺めていた。

「どうしたんですか、シャラさん」

ふいに声を掛けられ、シヤラは我にかえった。シヤラと同じこの店の店員の少女だった。

「あっ、ごめん。考え事してた」
少女がにっこりと微笑む。

「考え事なんて、らしくないですよ。ゆっくり休んで元気出して下さい。……なんて言いたいところですが、お客さんが増えてきてて」
少女が、頭をぽりぽりとかく。

「接客、やってもえませんか」
シヤラは、にっこりと笑った。

「もちろん」
少女の顔が、ふっとやわらぐ。ホッとしたようだ。シヤラの事が気にかかっていたのだろう。
さつきよりも騒がしくなった店内を見回す。あの男がいなくなっていた。

「ねえ、藍色の瞳をした旅人って、見かけなかった？」
少女が、首をひねる。

「うーん。旅人は、見てないな」
「そっかあ」

シヤラはあの石をポケットに押し込むと、また接客を始めた。

（結局、名前も聞かずじまい、お礼も言わずじまいだったなあ）
シヤラは、ぼんやりと思った。満天の星空を見上げる。この世界を司っているという龍の姿をした、星ぼしが見返す。シヤラは、手の中へ視線を移した。

龍が刻まれた、青い石。

この石に願えば、本当に変わるの？
シヤラは半信半疑だった。

やるしかない。今、やるしかない。

（やらなきゃ、死ぬまで永遠にこの暮らしをする事になる）
何故か、心の奥底に潜んだもう一人のシヤラは、そう確信していた。

そんな自分に、驚く。だが、その通りかもしれない、という思いの
ほうが大きかった。

石を、強く握りこむ。目をつむる。

（お願い。私の運命を、変えて！！）

何も起きなかった。何も衝撃がこない。何も感じない。

気分が、一気に沈む。

（やっぱり、あれは全部嘘だったんだ。やっぱり、やっぱり……）

目を開ける。

「!？」

闇の中で

息が詰まる。驚きで、声すら出ない。

シャラの周りには、見慣れた部屋も風景も夜空もなかった。あるのは、ただ黒いだけの闇。他には、何もない。

（あれは、嘘なんかじゃなかった）

「やっと全員そろったか」

何処からか、声が聞こえた。男の声なのか、女のものなのか、さっぱり分からない。凜とした、よく耳に届く声だが何処か重みがある。それに、感情がなかった。喜びも、悲しみも、憤りも、何も感じられないのだ。もし、声の主の顔が見れたとしたら、その顔は無表情であっただろう。

（あの旅人？）

一瞬そう思ったが、少し違う気がする。

とにかく、その声は不思議な声だった。

「さあ、仲間とともに〈旅〉へ出るのだ」

（仲間？）

首をかしげる。

自分以外に、ここには誰もいなかったはずだ。

首をめぐらせる。シャラはハッとした。数メートル先に、人が何人かで固まって立っていた。

ふいに、その中の一人が振り返った。シャラに気付いたようだ。振り返った少女の歳は、十三といったところだろうか。

「これで最後？」

丸い顔に、優しい光を湛えた瞳が印象的な少女だ。

「……みたいね」

少女が手招きする。シャラが近づく。そこには、四人いた。

手招きした少女と、上品な感じのする少女、やせっぽちの少年に、三人から少し離れて立っている少年が一人。

シアラが四人をゆっくりと見る。

シアラに声をかけた少女の髪は、薄い黒。茶色というよりは灰色がかった黒だ。肌は小麦色。服は飾り気がなく、動きやすそうな格好だ。農家の子なのかもしれない。

それに対して、もう一人の少女の髪はブロンド。腰まである。肌は驚くほど白い。一度も外に出た事がないと言われたら信じてしまいそう。服はゆったりとした長袖のワンピース。光沢のあるその服は、高価なものだと一目で分かる。上品な彼女の茶色の瞳は、透き通った底の見えない湖のような知性をうかがわせる。シアラは驚いた。

（もしかして、貴族？）

あんな服を着れるのは金持ちの人だけだ。ましてやそれを毎日着れるとなったら、貴族ぐらいしかない。いや、もしかしたら王族かもしれない。

次にやせっぽちの少年。体が小柄で背が低い。服は、とにかくボロボロだった。破けてるし、焼け焦げてるし、穴があいてる。なんとかギリギリ服と言える状態だ。濃い茶色の髪も、もつれている。

（奴隷？）

数十年前から禁止されているそうだが、地方ではまだ奴隷狩りがいるらしい。

だが、彼の瞳はキラキラと生きる力に満ち溢れている。

もう一人、少年がいた。みんなから離れて立っている。背が高い。フードをかぶり、俯いているので顔は見えない。髪もフードつきのマントも、闇に溶け込むほど黒い。だが、何故か左肩のところだけ裂けている。

（旅人？それとも魔術師？）

この世界には、魔術というものがある。といっても、魔術師は数百年前から減る一方。そんなものに関わるのは、ほんの一部の人だけだ。おまけに、シアラはそんなものとは無関係。おかげで見た事も触った事もない。

シヤラは、マントを見詰めてはたと気付いた。

「あれ？ ……なんで、みんなの顔が見えるんだろう」

ここは、果てのない真っ暗闇のはずだ。つまり、光が全くない。なのに、黒いものは見えにくいとはいえ、相手の顔がはっきり見える。「自分たちで光を発しているのか、よく判らないけれど、ここでは物や人は見えるみたいなの」

王族の少女がシヤラの呟きに答えてくれた。

「そうなんだあ……」

改めて辺りを見回す。とりあえず、ここはシヤラの見知った世界ではないようだ。

「まあ、とにかく自己紹介しようよ」

シヤラに最初に声をかけた少女が提案する。

「じゃあ、私から」

農家の少女が間をおく。

「私はクラネス。クラって呼んでね。よろしく」

クラがにっこり笑う。隣の少女が感嘆の声をあげる。

「まあ。クラネスっていい名前。古代サリヤ語で“希望”って意味ですよ」

クラの顔がぱあっと明るくなる。

「あっ、知ってるの？ 嬉しい」

古代サリヤ語とは、ずっと昔、それこそ何千年も昔にこの国の土地で使われていた言葉だ。だが、今はもう使う事が出来る人は少なくなってきた。

王族っぽい少女がまた喋った。

「私は、リネラです。よろしくお願いします。……ちなみに、リネラとは古代サリヤ語で“山桃”という意味なんですよ」

やせっぽちの少年が口を開く。

「おれ、運。……じゃなくて、イチユト。ま、つまりサリヤ語で“運”って意味なんだけどな」

「私は、シヤラ。……古代サリヤ語では“幸運”だよ」

シャラが言う。自然と、視線が魔術師っぽい少年に移る。

四人があのマントの少年を見詰める。顔も上げずに、ぼそりと言。

「ダデイス」

リネラが目を見開く。その口から呟きが漏れる。

「ダデイスとは、サリヤ語で……“死”」

息が詰まる。

（死？ ……そんな名前を持った人がいるの？）

シャラは本気で疑った。偽名じゃないかと思ったのだ。だが、ダデイスはもう何も言う気はなさそうだった。

シャラは、なんだか無性にダデイスの事が気になった。

「……あれ？」

クラが首をかしげる。

「そういえば、みんな名前に古代サリヤ語の意味がある」

リネラが首肯する。

「そうね。五人も集まるなんて……」

シャラが眉を寄せて考え込む。

（という事は……）

この〈旅〉は、意味のある名前と、関係あるのだろうか。だが、その考え事をシャラは中断せざるを得なかった。声をかけられたのだ。

「あれ？ シャラ、なんか首に掛けてんのか？」

イチュトが首をひねる。シャラは、自分の首に手をやった。革の、強くなめらかな手触り。

「あ」

シャラの首には、紐が掛かっていた。たぐり寄せ、引っ張り出す。紐には、石がついていた。薄い青色をした石。龍の姿が刻まれた球体。よく見るとほんの少し、光っているように見える。

（これ、あの時の……）

イチュト、クラ、リネラがシャラの手元を覗き込む。三人が息を呑む気配がした。

ふいに、その石の横に同じような石が現れた。全く同じ龍。違うのは、色。

金に近い黄色をしている。

八つの目が、石から、それを掴んだ手、腕、顔へと移る。

持っていたのは、ダデイスだった。やはり顔は上げない。そして一言。

「自分でも、見てみるよ」

相手に、従うのは当然と思わせるような強い声。なのに、よく通る凛とした響きを持つ。不思議な声だった。ほんの少し、あの旅人に似ているような気もする。

三人は、言われるがままに自分の首に手を持っていった。

視線と視線が絡み合う。ダデイスとシャラの目が合った。それは、ほんの一瞬に過ぎなかった。だが、シャラにはその瞳が鮮明に見えた。

ダデイスの瞳は、濃い藍色をしていた。神秘と脅威に満ちた、深い深い深海の色。

（あの旅人と同じ色だ……）

やはり、これは一瞬に過ぎなかった。ダデイスが顔を背ける。

「自分でも、見てみるよ」

ふと、視線を感じたダデイスは、顔を上げた。シャラと目が合う。

その瞳に驚きの色がうかんでいたのは、分かっていた。だが、ダデイスは刹那、その瞳に魂が吸い込まれるような奇妙な感覚を覚えた。シャラの瞳は、美しいと感じるほど黒い瞳だった。

ふいに、耐えられなくなった。自分でも、よく分からない。とにかく、シャラの瞳を見ていられなくなったのだ。

ダデイスは、顔を背けた。

「あ」

そんな事には、全く気付いていない三人の声が、揃った。その手には、石。龍は、全て同じ姿をしている。やはり、違うのは色。

イチュトは濃い赤。リネラは茶色。クラは黄土色。

「五つの龍」

リネラが言った。

「あの、この世界を司っているという、龍」

「水龍、火龍、木龍、土龍、雷龍の事でしょ？」

クラが口をはさむ。

「そう。多分、この石はその龍を象徴しているか、その力があるのだと私は思うのだけれど」

「そうなんだあ」

シャラは改めてこの青い球体を、しげしげと見詰めた。一方イチュトは、これが？という顔で自分の石を見ている。

「まだ、何かあったような……」

リネラがぼそりと呟く。

「私の記憶だと、確かその五つの力があわさると、何かが起きると聞いたような」

リネラがまたうんうん唸り始めた。

シャラとクラが顔を見合わせる。二人とも、考えている事は同じだった。

シャラとクラが自分の石を出す。何も起こらない。すぐにイチュトとリネラも反応した。何も起こらない。黄色い石も現れた。これで、五つそろった。

シャラは自然に、自分が何をすべきなのか判ったような気がした。

声を張り上げる。

「いっせーのーせ！」

カチンと、石がぶつかる音がした。

一気に、辺りが明るくなる。五人を光が包み込む。シャラは、眩しさで目をつぶった。

ここは何処？

ンモオオオ~~~~ン。

前方から、牛の声。

メエエエ~~~~ン。

左から、ヤギの声。そして、右からも。

メエエエ。メエ~~~~ン。

こりゃ、どういうこっちゃ。

シャラは、恐る恐る目を開けた。目に飛び込んできたのは、ヤギ、牛、ヤギ。それに、ポカンとした顔が1つ。初めて見る顔だった。少年だ。ヒョロツとした感じの体格。目はつり目。髪は濃い灰色。彼の表情からすると、シャラ達は突然現れたらしい。

口は半開き。目はまん丸。ずいぶん見事な間抜け面だ。

少年の口が動く。

「だっ……誰？」

その喉が上下する。

「あなた達は……一体、誰？」
数秒の沈黙。

「……クラネスです」

クラが答える。少年が眉をひそめる。

聞きたいのは、名前ではないのだろう。だが、間違っではない。
あなたは誰ですかと聞かれて名前を答えただけなのだから。

とりあえず、シャラも同じ事をする。

「私はシャラです」

「おれ、イチュト」

「私はリネラです」

「……ダデイス」

なんだか奇妙な自己紹介を終え、再び沈黙。

「……あの」

今度は、リネラが喋りだした。

「ここは何処ですか？」

少年が口をもぐりと動かす。

「ラジェ村」

リネラが首をかしげる。そんな地名は、初めて聞いた。

だが、少年が先に質問してきた。

「魔術師なの？」

「どうして？」

「こんな所にいきなり出てくるなんて、おかしいよ」

「私達は、旅人です」

「じゃあ、どうしてパアツと光った後いきなり出てきたの？」

「私達、悪い魔術師に追われていたのよ。そいつらに、ここに飛ばされてしまったの」

すらすらと嘘を述べるリネラを、3人は呆然と見詰める。

「だから、今日は泊まらせてもらえない？」

それを、少年はあっさり信じてしまった。

「分かった。それじゃあ、父ちゃんに聞いてくる」

少年が走っていく。リネラが振り返る。ニヤリと笑った。

「これで、今日の野宿は無しになったわよ」

シアラ達は呆れてものも言えない。

ドリスの家は、質素なものだった。

ドリスとは、少年の父親の名だ。少年の名は、サテユ。

その家には、これといった特徴もなかった。木造で、床は全て板造りもしっかりしていて、広さもある。

「では、さっそく質問して良いですか」

全員が椅子に落ち着いた所で、リネラが口を開いた。

「あっ、はい」

ドリスが答える。

「ここはライ国ですよね？」

「そうだよ」

「ライ国のどの辺りですか？」

「えっと、ここはラドカザク山脈だから……都より北東になるかな」

「ラドカザク山脈！？」

ドリスの言葉に反応したのは、イチユトだった。

「それって、あの魔物がうようよいる険しい山脈？」

シヤラも聞いた。

「あの山脈のせいで向こう側の国もライ国に攻め入れないっていう？」

クラも反応した。

「あっ、いや、ラドカザク山脈って言っても、ここは麓だから。魔物も来たりはしないよ」

「そうなんですか……」

リネラが改めて言う。

「では、今日はここに泊まっていいいんですよね？」

「もちろん。……追っ手は、大丈夫なのかい？」

ドリスは自分達ではなく、リネラ達を心配しているようだった。

ここに留まって追いつかれないのか？という事だろう。

「大丈夫です。飛ばされる前にボコボコのボロボロにしましたから」

につこり笑顔で嘘を言う。ドリスも、サテユ同様、あっさり信じた。

「そうか。それなら安心だな」

逆に、大丈夫かこの親子と心配になるが、都合がいいので黙っておく。

向こうに見えるのは、蒼く霞むラドカザク山脈。だんだんと、星が煌めき始める。そんな空の下を、シヤラは1人で歩き回っていた。食後の散歩だ。

ふと、黒い人影を見つけた。声をかける。

「何してるの？」

返事は無い。近づく。

「何してるの？」

繰り返す。やはり、返事は無い。さすがに、ムツとした。

「ねえ。ダデイス、聞いてる？」

ふいに、ダデイスが空を指差した。シヤラがその方向をみる。ラドカザク山脈の上空だ。

「何？ ラドカザク山脈がどうかしたの？」

訝しげにダデイスを見やる。

「見えないのか？」

ダデイスがシヤラへと顔を向ける。一瞬、その藍色の瞳に魅せられそうになる。

「……見える？ 何が？」

ダデイスは驚いたようだった。ほんの少し、目が見開かれていた。

「見えないのか。そうか……」

首をかしげる。

「どうかしたの？ 何かあるの？」

「もしかしたら……」

「もしかしたら？」

言うべきか迷っているダデイスを促す。

ダデイスの視線が宙をさ迷う。

「ヤバい事になるかもしれない」

「え……」

ぼそりと呟かれた言葉に、驚愕する。

ここは何処？（後書き）

実はこの小説、私が小6のころ思い付いて書いた、暇潰し用の書きかけの小説がもとなんです。余分な部分を削ったらこうなりました。ですが、もとの話もこちらへんで終わっています。これからは、今の私が書くのだ、と思い、ドキドキしています。

こんな私ですが、これからこの小説を読んでもくれたら嬉しいです。これからもよろしく願います！

奴らがやって来る

それから、数日がたった。

無口だったダデイスも少しは喋るようになった。

シャラ達は、ドリスの家に泊めてもらい、仕事を手伝う事でお金ももらった。

「ねえ」

風呂上がり。布団を敷いた方がいいが眠れないのは、同じ部屋で寝る事になったクラ達3人。

「みんな、どこに住んでたの？」

クラが聞いた。

「私は、ラウジ平野の普通の農家だよ」

「私は、都の飲食店の店長に拾われたの」

シャラが答える。

「私は金持ちの子ども好きの貴族に拾われたの」

リネラも答えた。

「じゃあ、2人とも都に住んでたんだ。ねえ、都ってどんな感じ？」

「うーんと……」

リネラが話し始める。

(……あつ)

シャラの動きが止まる。窓を覗む。その外で、月光を浴びた草が煌めく。何もおかしな所はなかった。だが、シャラは確かに見た。

(間違いない)

草原を、黒いものが横切った事を。そして、それが鳥の形をしていた事を。

大きく鋭い鉤爪。大きく羽ばたく翼。曲がった鋭いくちばし。あれは……。

(鷲だ)

ぞくり。

シャルの体を何かが貫く。うなじから背中にかけて毛が逆立つ。予感がする。悪い悪い嫌な予感が。

「……シャル？」

ハツとする。気付くと、クラトリネラが顔を覗き込んできていた。

「大丈夫？ 何かあったの？」

「えっ、あ、何でもないよ」

だが、シャルの顔は蒼白になっていた。声もか細い。

ジッとシャルの黒い瞳を見詰める。

シャルは居心地が悪くなった。なんだか、クラに心の奥底まで覗き込まれているような、不思議な、不安になる感覚がするのだ。

「嘘ついてるでしょ」

クラがムスツとした顔で言った。

「え」

「私に嘘ついたって無駄だよ。……ねえ、どうしたの？」

クラが心配そうに聞いてくる。

「……驚がいたの」

「驚？」

頷く。

「なんだか分からないんだけど……予感がしたの」

「予感？」

「そう。悪い、嫌な予感」

だが、クラトリネラはその事について聞き返せなかった。

「おい。明日、早朝にここを出発するぞ」

ダデイスが勢い良く戸を開けて大声で言ったのだ。

イチユト達は、シャル達3人より先に風呂に入っていた。だが、睡魔がやって来てくれない。

「なあ」

ダデイスが声をかけた。

「お前、奴隷だったのか？」

イチュトが首をひねる。

「ああ。そうだ。それが、どうかしたのか？」

「特に意味は無い」

「お前、魔術師なのか？」

今度はイチュトが聞いてきた。

「魔術は一応使える」

「ふーん。あ、使ってみてよ」

「え」

ダデイスが驚く。

「おれ、魔術とかって見た事無かったんだ。見せてくれよ」

イチュトが目をキラキラさせて言った。

「え。いや、でも」

「な？ いいだろ？」

イチュトがダデイスにズイツと顔を寄せる。壁にもたれて座っていたダデイスに逃げ場は無かった。

「う……」

期待に輝いた瞳を直視出来ず、目を逸らす。

「いや、ちょっと待」

2人が静止する。窓の向こうで、黒い影が旋回した。だが、すぐに身を翻して飛び去った。

「……なんだ、今の」

「あれは、魔物だな」

「魔物は来ないってドリスが言ってたぞ？」

「あの魔物は、操られていた。ラドカザク山脈の野生の魔物じゃない」

「という事は……」

「そうだ。敵はもっという」

「あ」

目を見開いて窓を見詰めていたイチュトが、ハッとして振り返った。

「なんだ？」

「お前、何でそんな事が判るんだ」

「……本能じゃないか」

答える前に妙な間があいた。

「それより」

ダデイスが話を変えた。

「明日は、早朝にここを出発しないと」

「ここで迎え撃てばいいじゃないが。それに、目的はおれ達じゃないかもしれないぞ」

「ここで迎え撃ったらサテュ達も巻き込んでしまう。それに、おそらく目的は龍の石だ。奴らがやって来たのはおれ達がここに来た日の夜だ」

「そんな前からいたのか？」

イチユトが目を丸くする。

「ああ。ただこっちを見ているだけのようだから放っておいたが。まあ、どっちにしろ上空にいたからどうしようもなかったな」

「そうだったのか……。そうだな。明日、早朝に出発した方が良い」

「シヤラ達にも言ってくる」

言うか早いかダデイスが立ち上がる。イチユトも後を追った。

「おい。明日、早朝にここを出発するぞ」

ポカンと魅せられたように藍色の瞳を見詰めていたリネラ達が、聞いてきた。

「……何で？」

「もうすぐ、ここは襲われる」

ダデイスとイチユトが、さっきイチユトに説明したことをクラ達にも説明し始めた。

「もう少しゆっくりしていったらどうだい？」

寝癖がついたままのドリスが言った。

「今出発すれば、日が落ちる前に目的地に着くので。ありがとうございます」

「ざいました」

リネラが嘘をドリスに信じこませる。

「そうか。じゃあ、気を付けてな」

「またねー！」

サテユがブンブン手を振っている。

まだ日も完全に昇っていないなか、シヤラ達5人は出発した。

「じゃあ、とりあえず街道を通ろうよ」

サテユ達が豆粒に見えるほど歩いてから、クラが口を開いた。

「そうだね。とにかく遠くに行かないと」

夕暮れの中、焚き火のパチパチいう音が響く。

リネラ達は、午後から街道を逸れていた。そうしないと街道にいる人達まで巻き込んでしまうからだ。

夕食後。

「……あ」

クラが言った。

「どうした？」

「また、あの鷲がいた」

「じゃあ……ふわぁーあ……今夜来るんじゃないか」

言葉とは裏腹に、暢気にあくびをしながらイチュトが言った。

「とにかく、おれは寝る」

「爆睡しないでね」

「仮眠だから大丈夫」

イチュトが横になる。ダデイスが戻ってきた。

「魔術結界は二重に張っておいた」

「なら、大丈夫なんじゃない？」

シヤラが期待の籠った目で見上げる。

「多分、壊される」

ダデイスが首を横に振る。

「おれは、魔力は強くない。それに、魔術に長けてもいない。一応

魔術が使えるだけだ」

「そっか……。ねえ、魔術師ってどうやって魔術を使うの？」

「魔術師には2つある」

ダデイスが座る。

「生まれつき魔力を持っているのと、修行をしてこの世界に満ちている魔力をえるようになるやつだ」

「ダデイスはどっちなの？」

「生まれつきだ。祖父から受け継いだ」

「そうなんだ……。魔物って、魔術を使う動物って事なの？」

「魔力を持った動物、の方が近い。普通の動物の姿をしていない魔物もいる」

「例えば、どんなの？」

「ドラゴンとか」

「ドラゴンって龍の事でしょ？」

「ああ」

「それじゃ、この世界は魔物が司っているって事？」

「いや、違う。龍は世界を司る〈力〉を持っているから、魔物じゃない。ドラゴンは〈力〉を得られず、龍になれなかったから魔物なんだ」

「へえー」

「おれ達も寝よう。仮眠はとっておいた方が良い」

気付くと、クラトリネラも寝ていた。

「そうだね」

シヤラも横になる。朝早かったせいか、すぐに睡魔がやって来た。

それから数時間後、真夜中にダデイスはがばりと起き上がった。

「……来た」

横でいびきをかいていたイチュトを揺する。

「ほら。起きろ。魔物が来たぞ！」

声を張り上げる。

「起きろ！ 敵だぞ敵！ 魔物だぞ！！」

「う……ん……」

目を擦りながらシャラが起き上がる。

「うーん……カキ？ 柿食べたいなあ……」

寝惚けたクラは聞き間違えたようだ。

「ん……何？」

「ううーん……んあ？」

「魔物が来たぞ！」

その言葉に、一気に眠気が吹き飛んだ。

「魔物？ 何処？」

シャラがキョロキョロと辺りを見回す。

「あっあれ！」

リネラが指差す。

シャラ達はその方向を見る。

「！？」

敵の目的とは

カイノ山。

それは、ラドカザク山脈にある。

そして、そこにはある組織の砦があった。

「なんですってえー!？」

甲高い女の叫び声が響き渡る。

その場にいた全員が、顔をしかめる。

「レイア、そのキンキン声は止めてくれ」

図体の大きな男が言う。レイアと呼ばれた女が叫ぶ。

「うるっさいわねえ! 驚いたって別にいいでしょう。この豚が」

「罵るなら豚ではなく熊にしてくれ」

「うるっさいわよ。この熊もどきい!」

「もどきはいらない」

「うるっさいわよ。この熊!」

レイアは変な所が素直だ。

「変な会話」

ぼそりと青年が呟く。

「ギユラ、何か言ったあ?」

ギユラこと青年は心の中で舌打ちする。

(聞こえてたか。面倒臭い奴)

だが、にっこりと笑顔で言った。

「いいえ。何も言っていないせんよ、レイアさん」

「そ。ならいいわ」

あっさり信じるのも、レイアの特徴だ。

「それで」

少女が口を開いた。

「これから、どうする?」

「もちろん、龍の石を持ってるっていう〈世界を変える者〉を叩きのめすわよお！」

「それから、どうする？」

「何言ってるのお。龍の石奪うに決まってるじゃない！」

「それは駄目だ」

男が言った。

「なんですってえー！？」

今日二度目の台詞。

「龍の石は〈世界を変える者〉にしか操れない」

「やる前に諦めんじやないわよおー！ あんたはそれでも男かあーっ」

「男だ」

「だったら証明してみせなさいよおー！」

「証拠ならある。見るか？」

（あ。カル、服脱ぐんじやないだろうな？）

「見るに決まってるわよお！」

ギユラはまた、心の中で舌打ちする。

（あー、くそっ。面倒臭い奴らだなもう。レイアは「見る」の意味解ってないし。馬鹿かコイツら）

「あの、カルさん。〈世界を変える者〉にしか操れないというのは、どういう事ですか？」

ギユラが、変な事になりそうなので話題を変える。

「龍の石っていうのは、〈力〉を封じ込めたものだ。その封印を解けるのは、〈世界を変える者〉だけだと、龍の書に書いてあった。

だから、僕達には操れない」

カルこと男が言った。

「龍の書ですか……。それなら、確かでしょうね」

「やる前から諦めん」

「では、どうしますか？」

レイアの叫びをギユラが遮る。

「生け捕りにするしかないだろう」

「ちよっとお！ 人の話聞きなさ」

「そうですね。監視しておいた方が良いでしょう」

「またもや、レイアをギユラが遮る。」

「私がやる」

「ずっと黙っていた少女が名乗り出た。」

「分かりました。それでは、ルアさんお願いします」

「魔物を使えば良いだろう？」

少女ことルアが聞いた。

「ちよっとおー！ 無視してんじゃ」

「はい」

ギユラはやはり、レイアを遮った。

（全くもう面倒臭いな。黙れよこのキーキー女が。あんたは喚くことしか出来ないのか。この馬鹿が）

とか思いながらも、それをおくびにも出さず、微笑を湛えたまま。

それが、カイノ山で起きた数日前の出来事。

敵の目的とは（後書き）

今回は、短いです。きりの良い所で、とやったらこうなってしまうました。

次回は、ダデイス達の魔物との戦いを書く予定です。

初心者の私が書くこの小説はめちゃくちゃですが、一生懸命書くので、これからもよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2667x/>

ガイラーシェトラ

2011年11月13日05時21分発行